

幼稚園における 運動用具の効果的 使用と改善について



大阪市立愛珠幼稚園

一、研究題をえらんだ理由

高層建築の建ち並んだビル街にある本園は、時代の進展に伴い、仰ぎ見る青空は次第にせばめられて、太陽の恵みを受ける時間が非常に少なくなってきた。今更園庭の拡張も望まれず、じゅうぶんな戸外遊びをさせられないことが、大きい嘆きになってしまった。しかしこれを不可抗力として、そのまま手をこまぬいていられるものではない。幼児の健康管理上、この欠陥をどうして克服すべきかが、私たちに与えられた課題であった。

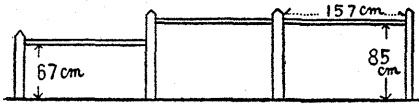
幸に本園の遊園は、六十坪余の遊戯室と、保育室、廊下がほとんど平坦で、且つ、上靴と下靴の履きかえを廃したから、遊園が非常に広やかに感じられて、運動を阻害する抵抗を無くした。そこで、雨の降らない限り、なるべく戸外で遊び、日光に浴することを奨励すると共に、幼児の意欲をそそる楽しい遊園を設備することに努力を重ねてきた。

即ち、理想の遊園として、でき得る限り運動用具を設備して、変化の多い動的な面と、緑深く、休らぎを与えることのできる静的な面をもつ遊園に改造し、保育者の適当な看護指導と相俟って、幼児を戸外遊びに誘導しかなり此の欠陥を補うことができた。

しかしながら、保育の実際に当る我々の経験をとおして、創意工夫により遊具を改善し、一層身体的発育の向上や、感覚機能の発達の効果を挙げんものと、この研究を始めたのである。

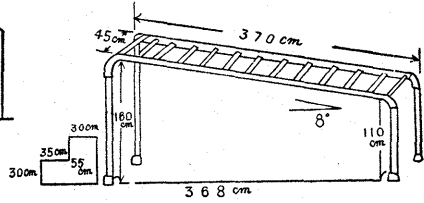
二、研究のすすめ方

(1) 鉄棒



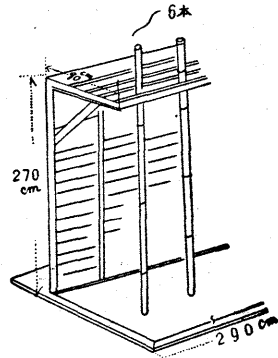
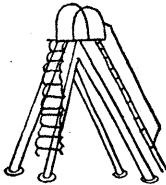
鉄棒の直径……2.65cm

雲梯 (2)

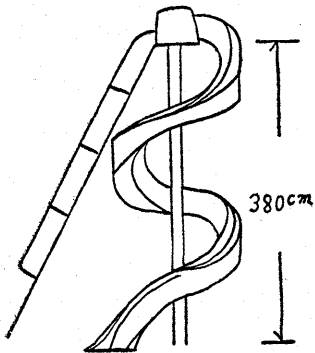


肋木 (3) 竹登り(4)

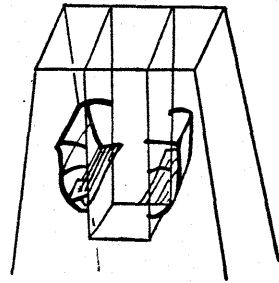
(5) 吊り梯子



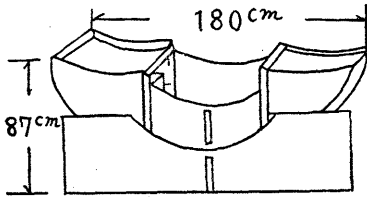
(6) 廻旋すべり合



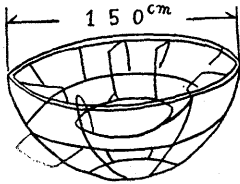
(7) 箱型プランコ



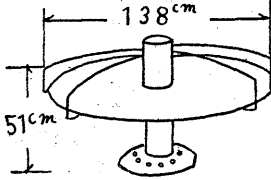
(8) 舟型シーソー



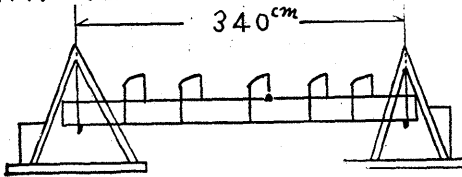
(9) ハーフボール



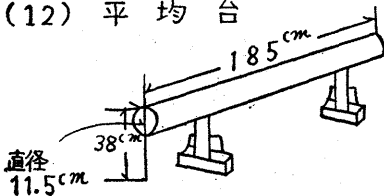
(10) スーリーゴーラウンド



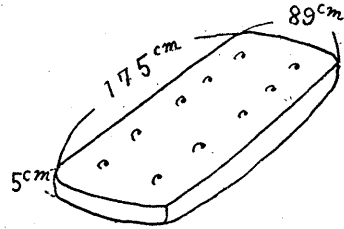
(11) 遊動橋



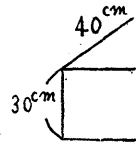
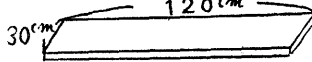
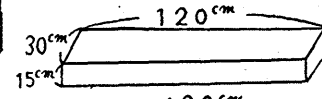
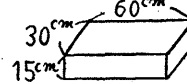
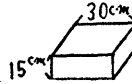
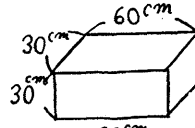
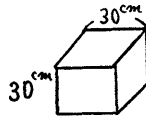
(12) 平均台



(13) マット



(14) 大積木



(15) 跳縄

長さ 160 cm

(16)

直径

20 cm

16 cm

8 cm

I どのような遊具に興味をもつか

A 方法

幼児の自由遊びのうちに、運動遊具の使用状態を調査し、その実態をとおして、本題を研究することにした。

①対象

全幼児 二二六名(男一〇九名、女一一七名)

一年保育児 一六五名(男八三名、女八二名)

二年保育児 五一名(男二五名、女二六名)

②調査の対象とした運動遊具

- | | | |
|--------------|----------|----------|
| 1、鉄棒(低) | 2、雲梯 | 3、助木 |
| 4、竹登り | 5、吊り梯子 | 6、廻旋すべり台 |
| 7、箱型ブランコ | 8、船型シーソー | 9、ハーフポール |
| 10、メリーゴーラウンド | 11、遊動橋 | 12、平均台 |
| 13、マット | 14、大積木 | 15、跳繩 |
| 16、ボール | 以上十六遊具 | |

③調査の時期

昭和三十年五月より、四季にわたって適当な四期間を定め、

一期間を、雨天を除く十日間として、連続調査した。

第一期 昭和三十年五月二十七日—六月二十二日

第二期 同 七月一日—七月十五日

第三期 同 十月五日—十月十七日

第四期 同三十一年一月十六日—一月二十六日

④実施方法

調査の時間は、一日の保育時間中、全幼児が最もよく自由遊びを楽しんでいる午前十時三十分より十五分間とした。

各組別の番號札を、幼児の腕につけて、自由遊びの状態を一

(第一表)

遊具の別 遊具種	昭和 年 月 日				天候		おん		しつ		記録者印	
	あ	お	も	も	き	みどり	あ	か	合	計	男	女
組名												
員数												
計	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
記事												

齊に観察し、調査遊具を使用して遊んでいる幼児の番號並びに遊びの状態を、第一表の用紙に記録した。

そして、それぞれ幼児の個人票に日々の状態を明確に記録すると共に、各遊具別使用人数の集計をした(第二表)

B 結果

幼児の遊具に対する興味というものは、いいかえればその選具がどれだけ幼児をひきつけるかということにもなる。

次の表は一日に各運動遊具を使って遊んだ人数の十日間の合

計、即ち一期間に、その運動遊具を使用して遊んだ幼児の数である。

遊具別日々集計表 (第二表)

組名 種別		しろ		むらさき		き		みどり		あか		計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
		鉄棒	使用人数										
	使用回数												
雲梯	使用人数												
	使用回数												
助木													
竹登り													
以下この 十六遊具欄													

第三表の人数の多少は、その遊具に対する幼児の興味の強弱を表わす一つの資料とみなすことが出来る。

①運動遊具の使用頻度による興味及び時期による相異
第一期では、男女共に廻旋すべり台で遊んだ人数が非常に多く、これに対する幼児の興味の強かったことを示している。使

(第三表)

期 性別 運動遊具名	一 期			二 期			三 期			四 期			全		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
	鉄 棒	31	113	144	23	146	169	23	141	164	19	58	77	96	458
雲 梯	55	109	164	33	86	119	39	75	114	16	45	61	143	315	458
助 木	70	37	167	31	36	67	47	64	111	6	9	15	154	146	300
竹 登 り	72	41	113	50	46	96	33	62	95	4	6	10	159	155	314
吊 り 梯 子	51	75	126	64	85	149	20	60	80	10	31	41	145	251	396
廻旋すべり台	176	171	347	65	46	111	79	33	112	70	37	107	390	287	677
箱型ブランコ	53	35	88	22	38	60	34	31	65	40	9	49	149	113	262
船型シーソー	57	50	107	32	40	72	40	18	58	42	39	81	171	147	318
ハーフボール	113	79	192	61	39	100	54	46	100	35	39	74	263	203	466
メリーゴーラウンド	50	72	122	8	20	28	40	35	75	23	35	58	121	162	283
遊 動 橋	59	91	150	34	52	86	42	45	87	33	24	57	168	212	380
平 均 台	78	64	142	25	47	72	15	15	30	57	55	112	175	181	356
マ ッ ト				151	43	194	103	16	119	124	1	125	378	60	438
大 積 木	66	6	27	78	3	81	82	1	83	101	4	105	327	14	341
跳 繩	71	35	106	97	20	117	41	39	80	33	168	201	242	262	504
ボ ー ル	83	65	148	46	180	226	2	26	28	2	7	9	133	278	411
合 計	1085	1043	2128	820	927	1747	694	907	1401	615	567	1182	3214	3244	6458

用人数に多少はあっても、全体的にみてよく運動遊具を使用している。

第二期は、この期から、新しくマットを調査の対象として入れたので、これに幼児の興味が集った。こうしたことは統計上からは完全といえないが、教育的にみて、運動遊具として、是非必要であると考え、あえて二期から入れたのである。二期で使用人数の多いのは、マットの他に女兒のボール、鉄棒である。一年中で最も気候がよく、身体的にも活動のはげしい第三期は、男児では、一番興味のあるのが、マット・大積木・女兒では鉄棒・雲梯であって、他の運動具との差が大きい。

第四期は、季節的な影響が関係しているのであろう。跳繩で遊ぶものが非常に多く、陽の当たらない場所に設置してある助木・竹登りは、使用者が極く少ない。

十六遊具を、使用人数の百分比を出して使用割合順にならべてみると第四表のようになる。

遊具名	百分比
1. 廻鉄旋すべ	10.48%
2. 跳繩	8.58%
3. ハーフボール	7.80%
4. フォンテール	7.22%
5. ツーボード	7.09%
6. マホ遊平大	6.78%
7. 吊遊均積	6.36%
8. 遊平大	6.13%
9. 遊平大	5.88%
10. 遊平大	5.51%
11. 遊平大	5.28%
12. 遊平大	4.92%
13. 遊平大	4.86%
14. 遊平大	4.68%
15. 遊平大	4.10%
16. 遊平大	4.06%

これによると、廻鉄旋すべり台・鉄棒・跳繩・ハーフボール・雲梯などは、非常に幼児をひきつける力をも

っており、船型シーソー・箱型ブランコ・メリー・ゴーラウンド

などは、比較的興味が少ないといえるのではなからうか。

②男女の相異

これを男女別及び各期について考察し、比較すると、第五表のようになった。

(第五表)

期	男児が特に興味をもつもの	女兒が特に興味をもつもの	男女の興味のほぼ同一のもの
一期	大積木	鉄棒・雲梯	廻鉄旋すべり台・平均台・船型シーソー
二期	大積木・マット	鉄棒・雲梯・ボール	船型シーソー
三期	大積木・マット	鉄棒・雲梯	助木・竹登り・船型シーソー
四期	大積木・マット	鉄棒・雲梯・跳繩	助木・竹登り・船型シーソー

③遊具別にみた各期の差

男女別に運動遊具に対する季節の差を考察し、その特徴を知ることが出来たが、この項では各運動具別に、各期を比較し季節によって幼児の興味がどのように変化するかということを考えた。各期により、特に目立って興味に変化のあるものを挙げてみる。

女兒における二期のボール

これは、夏の暑い日ざしを避けて、廊下や遊戯室でまりつきを始めたり、それまで運動遊具に親しめなかつた非活動的な女兒が、手近かなボールに興味をもちだしたことによるのである。

・女児における四期の跳繩

冬期に「なわとび」が好まれることは、季節的な遊びとして一般的に共通なことであるらしい。二期までは主として乗物ごっこに使用していた繩で、四期には「なわとび」をして遊ぶようになった。この頃になると、跳ぶ力も相当できてきて、リズムミカルな「なわとび」をして、寒い日も戸外で活動的に遊ぶ女児が急激に増えた。

・廻旋すべり台

これは、四季を通じて興味の大きいものであるが、第一期は特にその使用度が大である。それは、入園の始めで、誰もが珍らしい廻旋すべり台に集まったということによるのである。それが、二期三期と生活経験が豊になり、且つ身体的活動が自由になればなるほど、遊びに変化ができて、人数は一期のように多くはないが、その内容に深さがある。

・助木、竹登り

冬期にはほとんど使用していない。これは、設置場所が日かげであることや、冷たいことが影響しているであろう。

四季を通じて、興味の差の比較的少ないものは、遊動橋・船型シーソー・箱型ブランコなどである。これらの遊具は、いずれも使用人数は少い。これは、遊び方にあまり変化がないので、興味を持続せず、運動の能力の低い者や、気分の転換、又は休養に用いる程度で、四季変化なく使用されているのであろう。

④各期運動遊具使用人数とその他の遊具使用人数との割合(第六表)

(第六表)

	運動遊具 使用人数		その他の遊具 使用人数	
	男	女	男	女
1 期	67.1%	41.0%	32.9%	59.0%
2 期	62.2%	63.3%	37.8%	36.7%
3 期	45.6%	49.1%	44.4%	50.5%
4 期	57.7%	48.5%	42.4%	51.9%

⑤個人の一番好む遊具からみた興味

幼児各個人の最も好む遊具を知ることによって、運動遊具に対する興味を考察してみた。すなわち、個人票により、調査期間内に、その幼児が一番多く使用した運動遊具を調べ、それを各個人が一番好む遊具とした。第七表は、その集計を表わしたものである。

⑥個人の最も好む遊具と使用頻度

個人の最も興味をもっている運動遊具と、使用頻度による興味の強さとを、比較すると次のようになり、大体一致していることが分った。

両者を考え合わせることによって、運動遊具に対する幼児の興味がある程度方向づけられたように思う。

⑦幼児の使用遊具数

(第八表)

順位	使用頻度による味		個人的にみた興味	
	使興	頻度	使興	頻度
1	廻旋すべり台		廻旋すべり台	
2	鉄 棒		鉄 棒	
3	跳 繩		ボ ー ル	
4	ハーフボール		マ ツ ト	
5	雲 梯		吊り梯子	
6	マ ツ ト		大 積 木	
7	ボ ー ル		雲 梯	
8	吊り梯子		跳 繩	
9	遊 動 橋		ハーフボール	
10	平均台		竹 登り	
11	大 積 木		遊 動 橋	
12	舟型シーソー		舟型シーソー	
13	竹 登り		メリーゴーラウンド	
14	助 木		助 木	
15	メリーゴーラウンド		箱型ブランコ	
16	箱型ブランコ		平均台	

(第七表)

運動遊具名	1年保育		2年保育		合 計					
	男女別		男女別		男女別					
	男	女	男	女	男	女	計			
鉄 棒		17		17		25	25			
雲 梯	4	11		15	1	1	4	12	16	
助 木	1		1	2	1	3	3	1	4	
竹 登り	3	1	4	3	2	5	6	3	9	
吊 梯子	4	15		19			4	15	19	
廻旋すべり台	20	14		34	2	2	22	14	36	
箱型ブランコ	1	1	2	2			2	3	1	4
シーソー	2	2	4		1	1	2	3	5	
ハーフボール	6	5	11	2	2	8	5	13		
メリーゴーラウンド	2	2	4		1	1	2	3	5	
遊 動 橋	3	2	5	2	1	3	5	3	8	
平均台	1	2	3	1		1	2	2	4	
マ ツ ト	16	2	18	3		3	19	2	21	
大 積 木	15		15	4		4	19		19	
跳 繩	7	5	12	1	1	2	8	6	14	
ボ ー ル	1	5	6	3	13	16	4	18	22	

(第九表)

運動遊具名	人 数	
	男	女
鉄 棒		25
雲 梯	4	12
助 木	3	1
竹 登り	6	3
吊 梯子	4	15
廻旋すべり台	22	14
箱型シーソー	3	1
ハーフボール	8	5
メリーゴーラウンド	2	3
遊 動 橋	5	3
平均台	2	2
マ ツ ト	19	2
大 積 木	19	
跳 繩	8	6
ボ ー ル	4	18
船型シーソー	2	3

幼児が、何種類位の運動遊具を使って遊んでいるかということも、運動遊具を価値づける一資料であると考えて調べてみた。運動具数が十六であるから、一期間の遊具使用可能数も十六である。(個人票により、次のような方法で使用遊具数を調べた。十日間〔二期間〕に一つの運動遊具で何回遊んでも、その幼児の使用遊具数は、一とこぞえられる。)

こうして集計したのが第九表である。

(男女別にみた個人の最も興味のある運動具)

期間内に使用した運動具数と頻度表(第十表)

四期を通じて最高使用運動遊具数は、十二である。

調査期間内に、いずれの運動遊具も使っていない幼児が、各期共に若干名ある。

各期別にみて、男児と女児の平均の使用運動遊具数は、各期共に男児の方が多い。

最高使用運動遊具数は、一期から四期へと男女共に少くなっている。

(第十表)

遊具数	1 期			2 期			3 期			4 期			合 計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
0	1	3	4	7	1	8	4	10	14	3	10	13	15	24	39
1	5	4	9	5	12	17	4	4	8	4	13	17	18	33	51
2	4	12	16	6	11	17	12	16	28	5	16	21	27	55	82
3	7	20	27	8	11	19	19	16	35	16	14	30	50	61	111
4	6	10	16	12	17	29	14	24	38	22	23	45	54	74	128
5	10	14	24	17	18	35	20	16	36	16	19	35	63	67	130
6	13	13	26	18	13	31	10	11	21	13	7	20	54	44	98
7	22	15	37	10	15	25	6	7	13	4	4	8	42	41	83
8	15	12	27	8	7	15	5	2	7	4		4	32	21	35
9	13	4	17	6	3	9	3	4	7	3		3	25	11	36
10	3	2	5	1	1	2	1		1				5	3	8
11	1		1	1		2	1		1				4	0	4
12	1	1	2										1	1	2
計	101	110	211	100	109	209	99	110	209	90	106	196	390	435	825
平 均	6.33	4.96	5.57	5.02	4.60	4.75	4.35	3.88	4.11	4.39	3.23	3.77	5.02	4.18	4.58

平均の使用運動遊具数も、上記同様、一期から四期へと、次第に少くなっている。

これは、幼児が一つの運動遊具を使用して遊ぶ持続時間が次第に長くなり、時を経るに従って、幼児の運動遊具に対する興味が固定化してきたことを意味するのではなからうか。

それと共に、比較的個人的な運動遊具による遊びから、社会的な集団遊びや、創造的な遊びへと変わって行く過程をも表わしているとおもう。

II 幼児は運動遊具を使ってどのような遊びをしているか

調査の対象となった遊具について、その遊び方と、運動効果とを併せて考察した。

- ① 鉄棒
- ② 雲梯
- ③ 助木
- ④ 竹登り
- ⑤ 吊り梯子

・吊梯子を上り、階段から降りる

・階段から上って、吊梯子から降りる

〔効果〕

・巧緻性・平衡感覚が養われる

⑥ 廻旋すべり台

〔効果〕

1 鉄棒

 とび上り	 逆上り	 腹かけ振動 より前回り下り
 中脚かけ とび上り	 逆上り補助	 腹かけ かぶ拾い
 片脚外かけ 上り	 背向を 脚かけ	 背向を肘かけ プランコ
 中脚かり 上り	 肘立て プランコ	 スカートをはき つけて逆上り
 両脚かけ 上り	 腕かけ プランコ	 前方回転
 腹かけ	 腹かけ プランコ	 後方回転
 腹かけ平掛	 腹かけ振動 より逆上り	 スカートかけ プランコ















 両脚かけ 前回り	 両脚かけ ぶらんこ	 倒立腹かけ
 脚めき回り 後方回転	 腕組み 両脚かけ ぶらんこ	 両脚かけ 振動
 棒下前回り	 両脚かけ ぶらんこ遊び	 逆手背に上り 前回り下り
 背面逆懸空	 倒立下り	 開脚前回り 下り
 両脚かけ 匠懸垂	 両脚かけ ぶらんこより 後方回転下り	 とびおり
 両脚かけ 逆懸垂より 片手とはなす	 片足首かけ から両脚 かけ	 効果 ○脚体運動の能力が養われる ○巧み性が養われる ○平衡感覚が養われる ○上体の筋力が発達する
 両脚かけ 逆懸垂より 片手片脚を はなして着地	 逆立ち	



















2 雲梯 (其の1)



 台より片脚かけ	 横かちぎ 低→高
 両脚かけ	 横かちぎ 高→低
 両脚かけより 換邊	 とびつき
 両脚をかけ 棒をせらす	 ぶらんこ
 倒棒に両脚を かけ、体をせらす	 懸垂で一段ずつ 移って行く
 両脚かけぶらんこ	 懸垂で横うつり
 倒棒脚かけ ぶらんこ	 倒棒懸垂で 横うつり
 逆上り	 脚換お遊び



雲梯 (其の2)

 懸垂で後向きに うつる	 四つ這い
 片手懸垂	 踵這い
 懸垂で移って 行く 低→高	 倒棒棒かけ で脚振り
 懸垂で移って行く (交互に) 低→高 高→低	 開脚立ち
 ぶらんこ 横振り	 腕立懸垂より ぶらん下り
 仰臥腕立上り	 棒下後方回転
 仰臥腕立上り の補助	 効果 ○巧み性が養われる ○高さに対する恐怖心を克服せしめ ○腕の力が強くなる ○平衡感覚が養われる

	一段ずつ上り 一段ずつ下りる		すべり下り (手だけで下り)
	片肘かけ上り		肘かけ
	腕かけ上り		腕かけ
	一休み		脚より広間を ぬける
	三段上り 三段下り 三段下り		片脚→上体の 広間ぬけ
	片肘を逆にかけ て上る		横あそび
	ふみ上り (交互は上って行く)		回り降り

	この場 どび		二本マスト登り (竹を指で はさむ)		ぶらんこ
	くるくる まわり		一本から 二本に移る		片脚を腕に かける
	竹すり		肋木の頂上 から竹の棒 は移って下りる		後ろ回転
	片脚かけ		肋木の頂上 から二本の 竹は移って おる		前方回転
	マスト 登り		すべり下り		脚かけ並懸垂
	二本マスト 登り		すべり下り (手だけで 下りる)		脚かけ ぶらんこ

	ぶら下り		腹ばい
効果 ・ 身体支配の能力が養われる	・ 上肢と胴体の筋肉が養われる ・ 巧緻性が養われる		

	脚かけ 逆懸垂でまわり 下りる		脚かけ 側立下り	効果 ・ 全身運動 ・ 巧緻性が養われる ・ 平衡感覚が養われる
---	-----------------------	---	-------------	---

- ・ 空間神経が養われる
- ・ 恐怖心を無くする
- ・ 平衡感覚が養われる
- ・ 脚力が強くなる
- ⑦ 箱型ブランコ
 - ・ 平衡感覚が養われる
- ⑧ 船型シーソー
 - ・ 全身運動
- ⑨ ハーフポール
 - ・ 平衡感覚が養われる
- ⑩ メリーゴーラウンド
 - ・ 引く力・押す力が養われる
- ⑪ 効果
 - ・ 平衡感覚が養われる
 - ・ 引く力・押す力が養われる
- ⑫ 遊動橋
 - ・ 効果
 - ・ 平衡感覚が養われる
- ⑬ 平均台
 - ・ 全身運動
- ⑭ 効果

・平衡感覚が養われる

・足の裏が強くなる

⑬ マット

・うさぎとび

・かえるとび

・川とび (開脚とび・両脚とび)

・跳び上り下り

・跳び越し

・小人さん

・ころころまわり

・たわらころころ

・だるまさん

・前まわり

〔効果〕

・身体支配の能力が養われる

・空間神経が養われる

・筋肉の柔軟性が養われる

・巧緻性が養われる

⑭ 大積み木

・構成・推理力が養われる

・巧緻性が養われる

・全身運動

⑮ 跳繩

〔効果〕

・跳力・走力が養われる

・巧緻性が養われる

・リズム感が養われる

⑯ ボール

〔効果〕

・投げる力・走力が養われる

・目測が出来るようになる

・リズム感が養われる

結論

幼児たちの自然の遊びは、時を追うに従い、幼稚な遊びから高度な技術を要する遊びへ、又、その遊具を、集団あそびの一つの用具として使用した、総合的な創造性を持った遊びへと変っていく。しかし、そこには、良い方への進歩ばかりでなく、危険な遊びや、他人に迷惑をかけるような遊びもあらわれて来るので、その遊具の効果的な遊び方を考慮して、使用させることを忘れてはならない。

III どのように改善すればよいか

幼児の運動遊具に対する興味の深さや、その遊びの内容、又、発達段階における身体的活動の内容、又、発達段階における身体的活動の大きさなどについて研究をすすめてきたのであるが、ここに必然的に起ってくる問題は、幼児の健康をより増進させ、且つ円満な発達を遂げさせるためには、どのように改善すればよいか

か、又新しく設備すればよいかということである。

本園設備の各運動遊具について再検討をし、次のように改善を試みると共に、今後引続き改善を計画しているもの、及び新設改善した運動遊具について述べてみる。

① 鉄棒

文献によると、鉄棒が体育用具とせられた始めは、丸太のようなものであったらしいが、木の代りに鉄棒を用いるようになり、太さも手の大きさと関連して現在のような細い鉄棒となったそうである。鉄棒の太さの国際的標準は、二八耗であるが、手の小さい日本人には二七耗が適当とせられ、更に幼稚園児では、それより二耗程細いのがよいとされている。この遊具は、ただ一本の鉄の棒にすぎないが、幼児たちの遊びはいろいろ変化があり、内容も豊かで、興味も深い。そして遊びによる身体的効果も非常に大きいので、許される範囲において数を増し、高さにも変化をつけることを計画している。

② 雲梯

鉄棒について幼児に興味のある運動遊具である。現在のように一基だけでなく、三基連結して幅を持たせたものの方が良いと思う。なぜなれば、運動量も多く、遊び方にもより多くの変化をもつことができるからである。場所が得られるならば、このように改善したい。上部の梯子が傾斜をもっているので、運動効果は大きい。これにかかりやすくするために、傾斜の高い方に補足台を設けているが、これは幼児が懸垂しつづ前進する時、高い方から低い方へ移動するよう注意している。雲梯の両脚に、二十糎位の

間隔で二段階鉄梯子を増設すると、補足台が不要になって、庭に広さが得られる。

③ 廻旋すべり台

幼稚園に入園してきた幼児が、真先に取りつくのは廻旋すべり台である。高い所に上りたいという幼児の欲求を満足させ、低い直線式のすべり台に比較して、すべり下りる快感もより強く味えるからであろう。おどり場も、幼児二人位で一ぱい、という適当な広さで、危険も無く、すべり台として良い条件を備えている。しかし、出来れば左右両廻のものに改善して、平衡が保たれるようにしたい。

④ 平均台

日常平らかな場所ばかりに生活していると、自然に平均保持の能力が低くなるものである。人間の平衡感覚は幼稚園時代からできているのであるから、この時代には必要な運動遊具である。本園の平均台は丸太であって、上の平かなものよりも効果は大きい。が一定の太さのものばかりであるから、太さや、高さの様式の異ったものをとり揃えたいと思っている。

⑤ メリーゴーラウンド

昔は枠の各々に馬がついていて、そのうち一つの馬には、チェーンがつき、自動式になっていたが、現在では破損してその用を失っている。遊び方も、ただ乗って水平に廻旋するというだけで、幼児たちの興味も薄い。そこで真中の支柱と、枠を高くして、自分で走りながら押し、その惰力を利用して、とび乗って、しばらくその廻旋を楽しむように改善したいと、計画中である。

⑥ 助木と竹登り

従来木製の小型の杵登りが一基あったが、腐蝕したのを幸に、助木と攀登棒のある現在のものを新設した。幼児は高い木に登り、冒險的なことを好むものであるから、助木と竹登りを併置し、頂上を広く簀板にして、わざと周囲に囲いをせず、助木から竹登りへ、竹登りから助木へと、遊びを連絡した。

⑦ 吊り梯子

高さの低い直線式のすべり台を改善したものである。このすべり台は単調であるし、高さも低いので、入園直後の幼児には喜ばれるが、運動遊具としての使用価値は少いので、この活用法を考えているとき、再度の修理が必要となったため、すべり板を除いて吊り梯子をとりつけた。揺れながら上ることはむづかしく、可成りの忍耐と、身体支配に伴う思考力を要する為、登り着いたときの喜びに幼児の興味をひきつけた。しかし使用場所が狭いので、これを、より改善することを考え、広い吊り網を設備したのである。


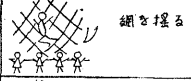



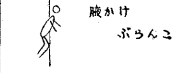

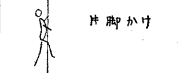

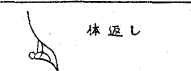

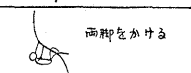

⑧ ハーフポール

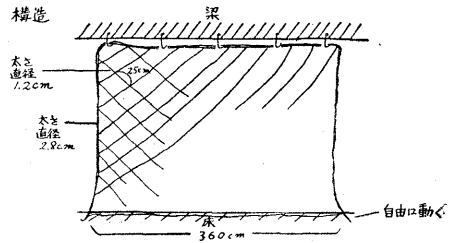
これは新設であるが、どこへでも簡単に移動出来るので便利であり、上下に振動しながら廻旋し、位置も変わるので、幼児の興味も深く、身体的効果も大である。

⑨ マット

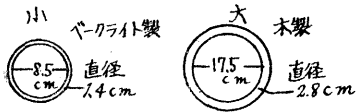
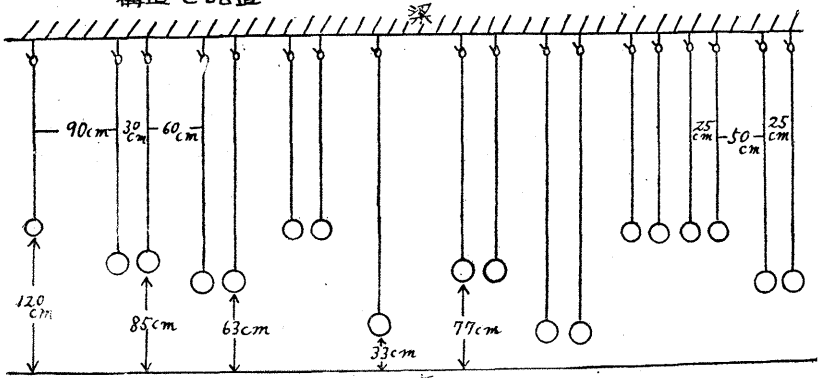
マットは、先にも述べたように、この研究の途上に、幼児の運動遊具として是非必要であると考えて、新しく設備したものである。素足になって、この上を歩いたり走ったりするだけでも気持ち

遊びの内容

 腰かけぶらんこ	 ネットを揺る
 足をかける揺る	 ネットを揺る
 ネット登り	 腰かけぶらんこ
 足からくぐり抜け	 片脚かけ
 頭からくぐり抜け	 株返し
 頭かけ	 両脚をかける
 ヒズつき	



構造と配置



<p>② 二人のり</p>	<p>屈脚振り越し</p>
<p>倒立 (一つのリングで)</p>	<p>横まわり</p>
<p>倒立 (後方回転から)</p>	<p>ゆりかご</p>
<p>前方回転から 脚をリングに かける</p>	<p>横振り</p>
<p>台上 はねとび</p>	<p>縄ぶらこ</p>
<p>開脚 振り越し</p>	<p>斜懸垂で 横まわり</p>

のよいもので、幼児たちの興味も深く、この上でいろいろな遊びを練り広げている。

⑩吊り綱

吊り梯子の項で述べたように、幼児たちの興味の深さや、運動能力・身体的効果などを考え合わせて、新設したものである。遊びの内容は、次に示す通り、身体の巧緻性や柔軟性を養い、冒険的なスリル感も味わえるものである。

⑪吊り環

幼児の動的欲求を満足させると共に、空間神経の訓練や、平衡感覚を養い、身体の巧緻性を培う全身運動として、最も代表的で良い遊具とされているブランコが、本園には設備されていない。このことは、ずっと以前から大きな悩みであったが、限られた狭い遊園では適当な設備場所も見当らず今日までしたが、このたびの研究から、この解決策として、新しく遊戯室にリングを設置した。

リングは外国では百年も前から盛んに使われていたもので、この運動は、懸垂性の運動の中でも最も強い運動とされて居り、日本では高度の技術を要するものとして、高等学校以上の学校に設備されている体育器具である。これを、幼稚園の幼児の遊具として設備したことは、先に述べたように、ブランコの無い悩みを解決する為の試みであって、勿論リング本来を要求するのではない。幼児たちの自然の遊びにまかせている。我々の予想もしなかった遊びを、幼児自身で創作し、各々自分の能力に応じて遊びを楽しんでいる。

以上、幼児の実態をおして、運動遊具の効果的な使用と、改善について研究をすすめてきたが、これらの遊具を、いかに適正に配置するかということも、忘れてはならない効果的使用法の一つであることを知った。

〔結び〕

幼稚園教育の目的は、幼児に適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することにある。環境の一つとしての遊具がじゅうぶんに設備せられ、しかもその効果的な使用が考慮せられているか否かは、心身の発達途上にある幼児の前途に、重大な影響を及ぼすものであって、幼児教育の実践面に従事している我々にとって、一日もおろそかにできないものである。

ここに私たちは、乏しいながら協力一致して、一年有余の歳月を努力に努力を重ねて、幼児の実態を通じて調査研究を行い、不備ながら一応まとめて、ここに発表することが出来たことは喜びであるが、なお残された問題が多くあって、各方面の指導を得て、引き続き一層研究を重ねていきたいと思っている。

(村田修子編)